

被災地支援のご報告

ボランティア作業

私達が支援を行ったのは、気仙沼市唐桑町。東京に本部を置く、被災地支援の団体「RQ市民災害救援センター」と連携して、現地での様々なボランティア活動を行いました。

被災地では人・物・お金が不足していました。それでも、全国から集まるボランティアと共に、瓦礫の撤去や、小学校でのイベント企画、引っ越しの手伝い、避難所への物資の輸送や心身の緊張をほぐすマッサージなど、土地勘も人脈もない中、被災地のニーズに合わせた活動を行ってきました。

減らない瓦礫、足りない人員など終わりの見えない支援活動にも関わらず、悲しみに暮れる方に寄り添い、笑顔を絶やさずに活動を行うボランティアの姿は頼もしく、被災者の方々を元気づけていました。

被災地から届いた手紙をご紹介します。

先日は食器や台所用品を頂きありがとうございました。皆様方の支えでここまでこられました。8月には2人目の孫が生まれ、家族の笑う声も多くなり少しづつ前を見て前進するのみです。皆様への感謝の気持ちを忘れず頑張っていきます。これからもよろしく願いいたします。皆様もお体に気をつけて下さい。ありがとうございました。

お茶碗プロジェクト

仮設住宅の建設が始まるにつれて、冷蔵庫や洗濯機などの家電製品以外は、入居する際に自分で揃える必要があることが分かってきました。

すべてが流された被災地では、近隣の商店も被災し生活用品が買えず、車も流された被災者の方々は、数十km離れたホームセンターにも行けない状態が続いており、これではいけないと思いました。

そこで、私達と繋がる様々な方に協力を呼び掛け、唐桑町内で仮設住宅に入居する320世帯に、食器やまな板などの生活用品一式の支援を開始し、8月には無事、唐桑町の全世帯に支援物資をお届けする事が出来ました。

被災地支援で、我が町を見つめる 理事長 三膳時子

家族の絆とは？エネルギーとは？暮らしの豊かさとは？等々、大きな犠牲があつて、私たちは真剣に考える年になりました。

震災から1ヶ月。避難所を訪ねた際に「北海道から来てくれたのかい、ありがとう」「漁師の女将さんかい、じゃー漁師の心意気は分かってもらえるね、頑張ってるからね」と声をかけていただきました。私の方が暗い顔をしていたように思います。

平成5年に発生した震度6の地震の時、我が家の子供たちは6才と3才でした。保育所で訓練をしていたおかげで、地震発生と同時に食卓テーブルの下に入りました。ガラスや食器棚が壊れる中、怪我ひとつしなかったのは、日頃の訓練の賜物と感じました。

地震＝津波ということを目に命じ、逃げる事が最良の手段、それが常に自然と向き合っている、浜中町の防災対策なのだと思います。

頂いた寄付金

2,828,383円

スタッフ派遣回数

11回(のべ15人)

支援活動の報告会

4回(浜中町、青森市、芽室町)

仮設住宅支援

320世帯

1200個の食器や生活用品

